

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380931

研究課題名(和文) 高機能自閉症スペクトラム障害の自己理解をめぐる葛藤と対処スキルに関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic Study of Conflicts and Coping Skills for Self-Understanding with High-Functioning Autism Spectrum Disorder

研究代表者

木谷 秀勝 (Kiya, Hidekatsu)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：50225083

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：児童期から支援を継続して10年間追跡調査を続けた高機能自閉症スペクトラム障害(以下、高機能ASD)がもつ安定した「自己理解」の背景には、柔軟な状況判断を通じた「自分らしさ」の表現と援助要請スキルの高さ、学習・就労体験からの達成感の高さが重要である。その一方で、青年期以降から支援を継続した高機能ASDの場合、家庭や職場において受身的な姿勢で支援を受けるだけでは、青年期以降の能動的な計画性や予測能力が十分に育たないことがわかってきた。そこで、集中型「自己理解」プログラムを通して、高機能ASDの能動性が賦活され、葛藤や対処スキルへの気づきが促進される効果が示唆された。

研究成果の概要(英文)：High-Functioning Autism Spectrum Disorder (HF-ASD) that author and colleges follow their supports for 10 years from childhood achieved stable "Self-Understanding". Because HF-ASD learned expression of their individuality with flexible understanding of situation, high skill of help-sign and high achievement of studying and working experiences. But, HF-ASD that we follow their supports for 10 years from adolescence have difficulty in activities at home and office, or intensive planning and predicting after adolescence. Finally, we suggested that intensive "Self-Understanding" Program have some effects for activating their activities and promoting their consciousness of conflict and coping skills.

研究分野：臨床心理学的視点を通して、自閉症スペクトラム障害児者の自己理解に関する調査研究を専門とする。

キーワード：臨床心理学 自閉症スペクトラム障害 自閉症スペクトラム障害の自己理解 ウェクスラー式知能検査
集中型「自己理解」プログラム

1. 研究開始当初の背景

高機能自閉症スペクトラム障害(以下、高機能 ASD)への理解は、早期療育の充実と特別支援教育の進展とともに急速に進んできた。ところが、こうした支援を受けてきた高機能 ASD の場合、成長と裏腹に「成長するからこそ生じる新たな葛藤」が生じやすいことが明確である。こうした葛藤を最小限にする要因を分析するため、筆者は高機能 ASD を対象に 8 年間の追跡調査を行った。その結果、小学生から中学生では、「困った」時に一人で対応できる能力の形成とその基盤に「達成感」から生まれる「自己肯定感」の維持が重要であること。中学生から高校では、複雑な状況や課題への迅速さと柔軟な認知チャンネルの切り替えが可能になると、環境に対応した新たな自己形成が進むことが示唆された。

その一方で、思春期以降から支援を始めた高機能 ASD の 8 年間の追跡調査では、対人過敏、自尊心の低下、そして同一性の混乱が顕著になることが示唆された。以上の 8 年間の追跡調査の成果からも、早期から自己形成に必要な「自己理解」とそれに適した支援の重要性が十分に理解できる。

2. 研究の目的

平成 25 年度と 26 年度の調査研究では、これまで継続的に追跡調査を行ってきた高機能 ASD への 10 年目の追跡データの収集(25 年度は、主に児童期からの支援群、26 年度は主に思春期・青年期からの支援群)を行い、高校・大学以降の青年期における安定した「自己理解」の要因の分析と青年期後期(成人期)に見られる「自己理解」の葛藤を明確にすることを目的とする。

以上の成果を基にして、27 年度では、高機能 ASD の「自己理解」を促進させるプログラム開発を進めることを目的とする。具体的には、25・26 年度で試行していた「自己理解」合宿、27 年度では複数の地域において実施しながら、青年期の高機能 ASD への集中型「自

己理解」プログラムの確立と効果に関して明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

平成 25・26 年度では、17 年度から継続的に追跡調査を行ってきた高機能 ASD のうち、児童期から継続的に支援を行い適応状態の良好な「児童期群」と、青年期に事例化した後に診断や支援を始めた「青年期群」との社会適応の質的差異を検討してみた。具体的には、児童期群の場合には、成長とともに高校年代まで継続的に支援を行い、8 年目、もしくは 10 年目の調査で WAIS- に該当する年代に達した高機能 ASD13 名と、青年期群の場合には、事例化した直後に WAIS- を実施した高機能 ASD12 名を対象として、各 IQ の平均と言語性 6 項目・動作性 5 項目それぞれの評価点の平均を t 検定で比較した。

平成 27 年度では、本研究の成果として 26 年度に作成した自己理解ワークブックを活用する 1 泊 2 日のプログラム(福岡市)と 3 泊 4 日のプログラム(愛知県日間賀島)を実行した。参加者は、高校生から大学生の高機能 ASD を対象として、本人告知を前提として、事前説明会を経て、保護者と本人から参加及び研究協力への承諾書をもっている。

4. 研究成果

本報告では、以下の 3 点を中心に報告する。

(1) 児童期からの継続支援群と青年期からの継続支援群との比較

その結果、図 1 で示すように、それぞれの IQ では、児童期群で「動作性 IQ」($p < .05$)、「全検査 IQ」($p < .05$)が有意に高かった。言語性項目では、両群に有意差は見られないが、全ての項目で児童期群が高い結果となった。動作性項目では、児童期群で「配列」($p < .10$)、「符号」($p < .01$)が有意な傾向、あるいは有意に高かった。

考察では、高機能 ASD の場合、今回の動作性の特徴から判断して、強い過敏性(「配

児童期群と青年期群の比較

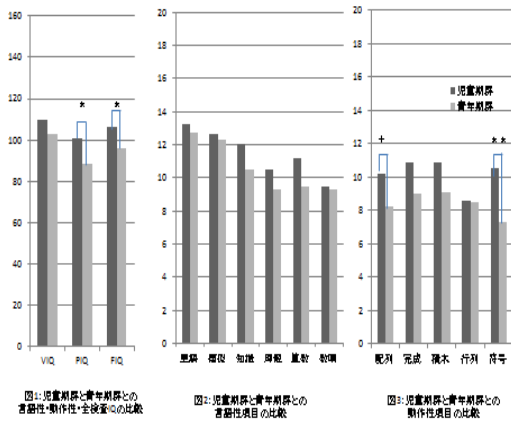


図 1

列」の高さ) や不器用さを高校以降も支援を続けることで、リスクを低下させることができる。一方、「自分が困った時の表現」の未熟さ(言語性 IQ の問題)は、学校環境の変化で揺れやすい。環境調整を行うことで、学習の習得(「符号」や高い動作性 IQ からわかる達成感)と自己肯定感が向上(全検査 IQ の高さ)して、その後の進路につながりやすい。過敏性や不器用さのリスクが高くなる思春期以降に、「自己理解」を進めながら、能動的にソフトスキルとしての『自分らしさ』を表現できるツールの獲得や余暇支援が重要になってくる。以上の4点からも、高機能 ASD への早期からの支援とともに、高校以降の支援が重要性があることが示唆された。

(2) 青年期から成人期にかけての変化と支援の重要性

この10年間で青年期以降から追跡調査を行ってきた高機能 ASD の5回にわたる WAIS- の変化を通して、先の問題点を明確にしたい。その際に、従来から指摘されている ASD の3つのタイプである受動型、孤立型、積極奇異型によって、支援の方向性が異なることがわかってきた。以下、それぞれタイプ毎に検討してみたい。

受動型(図2): このタイプの場合、大学入学後の適応が良好でない場合(自分から困

っていることを主張できない)が多い。他の事例でも見られるが、IQ が低下するリスクを抱えている。したがって、本事例のように、在学中から手帳の取得や障害者職業センターとの連携を取りながら、就労へと結びつくように支援することで、図2に示したように自己肯定感の回復とともに、IQ も元のレベルに回復させることができた。

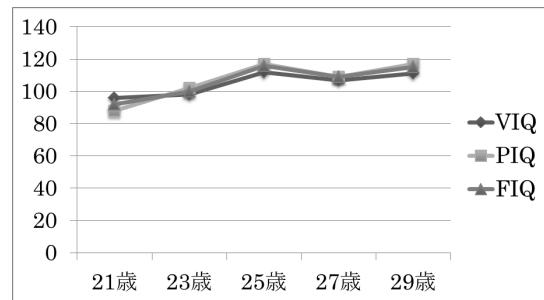


図 2

しかしながら、就労後の安定した生活パターンが続く中で、パターン化した生活リズムが長く続く場合には、20代後半から IQ や社会適応が低下するリスクが示唆された。

孤立型(図3): このタイプの場合も大学入学後の適応が良好でない場合(マイペースが強い)ため、周囲からの適切な情報収集ができない)が多い。そのために、早期からの支援体制を整備することで、受動型と同様に、作業への達成感が向上する傾向が見られる。ところが、社会で適応するようになると、再度、自分自身の行動パターンに固執する傾向(問題がないため、周囲からも支援を進めにくい)が強くなる。その結果、20代後半になると、柔軟な社会性が低下するようになり、その反動として、こだわりや強迫傾向が強

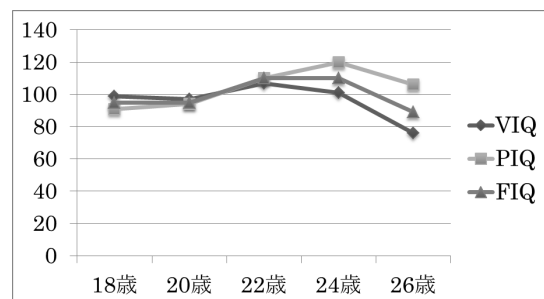


図 3

なることが示唆された。

積極奇異型（図4）：本事例に関しては、先の2つのタイプで生じたりスクもあり、大学入学後も積極的に支援を行い、卒業後も生活・就労ともに支援を継続した経緯がある。その結果からもわかるように、積極奇異型の場合には、多動を含めて積極的に行動するため、かえって支援を受けやすい特性を持っている。事実、この事例の場合にも、生活面での支援を受けた結果、情緒的な安定感も高く

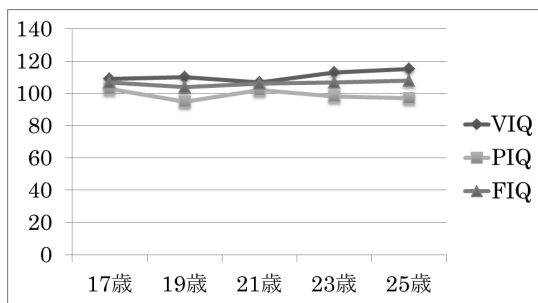


図4

なり、その分行動も積極的になったこともあり、大学の教員や友人、障害者就労先の指導員を含めた多くの支援を受けることで、それぞれのIQが維持される結果となった。

以上の結果からわかるように、青年期以降の高機能ASDの場合でも、児童期からの支援の有無に伴って、自己肯定感の差異が大きくなっていく。特に、青年期以降の支援の場合には、それまでの外傷体験からも自己肯定感が低下しやすいことは確かである。それだけに、青年期に必要な「自己理解」の前提として、日常生活での支援を含めて、手帳の取得等の支援体制の整備が急務である。その上で「自己理解」を進めないと、自分自身が「得意なこと」と「困っていること」が適切に表現できないだけでなく、生活全体がパターン化するリスクが高くなりやすい。

しかも、「児童期群」との比較からわかるように、ワーキングメモリーの予測能力の問題（計画性、余暇の充実感、時間感覚の鈍感さ）が顕著になるため、結果的に、「日常生活での疲れ」が極端に高くなる。また、青年

期以降では家族とのコミュニケーションの機会の減少やこだわりをもったマイペースさにより、家族が適切に対応できない場合や理解が乏しい場合も見られる。

以上の考察からわかるように、高機能ASDの場合でも、青年期以降も生活面や社会適応面での継続的支援が必須になることは明白である。

（3）自己理解の重要性と集中型「自己理解」プログラムの成果

以上のような成人期以降の生じやすいリスクを最小限に予防することを目的として、27年度では、青年期の高機能ASDを対象とした集中型「自己理解」プログラム合宿（以下、本プログラム）を実施した。

この2タイプのプログラムを通して明確になったことは次の点であった。参加者の「自己理解」の深まりと同時に、プログラムの経過とともに参加者の主体性（能動性）がより賦活され、その後の生活場面につながっていく効果が見られた。ただし、今後の課題として、本プログラムをさらに充実させるためには、「自己理解」を進める準備段階として身体感覚への気づき、他者とのアサーティブなコミュニケーションスキル、そして「援助要請」スキルの獲得が重要である。同時に、本プログラムがもつ臨床的な意義を明確にするため、評価方法を含めた、参加前後の変化、生活場面への般化に関する評価方法の開発を進める必要がある。

5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計16件)

木谷秀勝、青年期の高機能ASDへの支援 - 「自己理解」を中心に、児童青年精神医学とその近接領域、査読無、印刷中

木谷秀勝、中島俊思、田中尚樹、坂本佳織、宇野千咲香、長岡里帆、青年期の自閉症スペクトラム障害を対象とした集中型「自己理解」プログラム、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、査読無、.41、2016、63-70.

木谷秀勝、総論：思春期・青年期から始める「大人になる・社会に出る」ために必要になってくること、アスペハート、査読無、42、2016、8-13 .

木谷秀勝、田中亜矢巳、高機能 ASD 大学生に対する就労を視野に入れた支援の試み、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、査読無、39、2015、119-128 .

木谷秀勝、発達障害児の支援を長期的視点から考える 高機能 ASD 児の 10 年間の追跡調査を通して、岐阜県小児科医会報、査読無、48、2014、48-53.

〔学会発表〕(計 7 件)

木谷秀勝、青年期の高機能 ASD への支援 - 「自己理解」を中心に、日本児童青年精神医学会第 56 回総会、2015 年 9 月 29 日、パシフィコ横浜 (神奈川県横浜市) .

木谷秀勝、川口智美、豊丹生啓子、中庭洋一、高機能自閉症スペクトラム障害児者への 10 年間の追跡調査 - WISC- ・WAIS- のプロフィールからの分析、日本児童青年精神医学会第 55 回総会、2014 年 10 月 13 日、アクトシティ浜松 (静岡県浜松市)

木谷秀勝、川口智美、豊丹生啓子、本吉菜つみ、中庭洋一、青年期 ASD 者の WAIS- の追跡調査を通じた社会適応の分析、日本児童青年精神医学会第 54 回総会、2013 年 10 月 12 日、札幌コンベンションセンター (北海道札幌市)

〔図書〕(計 2 件)

市川宏伸、木谷秀勝、他 12 名、金子書房、発達障害の「本当の理解」とは - 医学、心理、教育、当事者、それぞれの視点、2014、97 - 104 .

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページなし

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

木谷 秀勝 (KIYA HIDEKATSU)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号 : 50225083